

体育科 「 課題の解決に向けて “運動の楽しさ” をそうぞうする子どもの育成 」

富嶋 瑛、東 亮多

1. 体育科における未来そうぞう

(1) めざす子ども像

今年度、体育科では“運動の楽しさ”をそうぞうしながら学ぶ姿を、育みたい子どもの姿と考えている。“運動の楽しさ”をそうぞうしながら学ぶ姿とは、以下の2つの姿を大切に考えている。

① 主観的な視点で運動の課題にアプローチする姿

自分でえがいた動きのイメージを具現化し、実際の動きとイメージを近付けていく姿。

② 客観的な視点で運動の課題にアプローチする姿

友だちと動きのイメージを共有し、動きの感じを伝え合って繋がり深めていく姿。

“運動の楽しさ”を自らそうぞうする経験を積むことで、運動することの良さに気づき、将来の豊かなスポーツライフに繋げられる素地を養うことができると考える。

(2) 体育科がになう3つの実践力

体育科学習では、体を動かすことが主な活動である。それによって経験したり、感じたりできることは体育科ならではの特性といえる。体育科では、この特性を生かし、3つの実践力と目指す子ども像との関わりを次のように捉えた。

主観的な視点で運動の課題にアプローチする姿

	実践力が見とれる姿	具体的な子どもの言動
主体的実践力	自分の課題の解決に向けて、自分の体を動かしたり、自分で考えたりしている。	「自分でできるところまではやってみよう。」
協働的実践力	友だちやチームの課題を解決するために、自分の体を動かしたり、自分で考えたりして得た解決の方法を伝えている。	「僕はこうしたらうまくできたよ！」 「ここを直したらもっと良くなると思うよ！」
創造的実践力	自分の課題の解決に向けて、自分でアプローチし続けている。	「うまくできないから、繰り返し練習しよう。」 「できているけど、もっと工夫してうまく動けるようにしよう！」

客観的な視点で運動の課題にアプローチする姿

	実践力が見とれる姿	具体的な姿
主体的実践力	自分の課題の解決に向けて、様々な視点や考えを基に、体を動かしたり、考えたりしている。	「へー！自分の動きはそうになっていたんだ。そこに気を付けてもう一度動いてみよう！」
協働的実践力	友だちやチームの課題を解決するために、様々な視点や考えを基に、体を動かしたり、考えたりしている。	「なぜ負けたんだろう…。さっきのゲームを動画で見よう！」 「コツやポイントを整理してみよう！」

創造的実践力	課題の解決を通して、新たな意味を見出し、価値付けしている	「学習が進んでいくと、友だちともっと仲良くなれたな。」 「好きじゃないと思っていたけど、やっていると楽しいな。」
--------	------------------------------	---

## 2. 体育科において3つの実践力を育むための手立て

体育科では、【知識及び技能（運動）】、【思考力・判断力・表現力等】、【学びに向かう力、人間性等】の3つを指導内容としている。自分の課題解決につながる動きができることで運動感覚や運動に対する自信がつく。また、友だちやチームの課題を解決しようとする過程で、友だちと協力し合う態度、思考力・判断力・表現力が養われる。この2つの要素があることで、課題にアプローチし続けることができ、その中で、新たな意味や価値を見出すことができる。このような指導内容が内包された学習の中で、指導者の以下のような手立てがあることにより、3つの実践力を育むことができると考える。

### (1) ジグソー型の学習形態を用いた展開

単元の一部にジグソー型の学習形態を用いる。はじめの段階では、全員で基礎となる動きを学ぶ。単元の中盤あたりで2～3のグループに分かれ、集中的にその単元の一部を学ぶ。専門性を身に付けてグループに戻り、自分の学んできたことを生かして学習を進める。

(主) 単元の一部を集中的に学ぶため、自分の課題について深く考えることができる。

(協) グループに帰ってきたときには、自分が学んできた内容について、様々な視点で友だちにアドバイスすることができる。

(創) 専門性を身に付けているため、意欲が持続しやすい。また、友だちに発信してフィードバックを得ることで、自分ができたときは別の喜びを味わうことができる。

単元のどの学習の部分にも、3つの実践力を高めるねらいがあり、意識して指導を進めることで、さらに効果が期待できる。

### (2) 「次にチャレンジしたいこと」を基にした課題設定

各時間の終わりに行うふりかえりや、体育ワークの記述から子どもたちの問いを見付け、それをもとに課題設定をしていく。そのサイクルが、単元を通して子どもたちの主体性を保つために必要であり、主体的実践力が育める手立てであると考えている。

**ふりかえり** 各時間の終わりに全体で交流する時間をとる。各々の発表したいことを発表するだけの場にならないよう、指導者が、めあてについて、友だちのよかったところ、見付けたコツ、次への課題の4点からその時間の様子や次時への繋がりを考えて選び、子どもたちに問い返す。

**体育ワーク** 本校では、冊子状のワークシートを用いており、書く内容は、めあて、本時にしたこと、できたこと・わかったこと、見付けたコツ、次にチャレンジしてみたいこと、ふりかえりである。学習中と違い、落ち着いて自分の動きや友だちの動きについてふりかえることができる。指導者が視点を持ってコメントをすることで、次時への意欲を高めることや、課題を探ることに活用している。

#### 【課題設定の例】

ゴルフ13（体づくり運動領域）2年生

時数	設定した課題	体育ワークや学習中の子どもの言葉から生まれた問い
1	自分の投げる力を知ろう。 ゲームを考えよう。	「もっと遠くにとばしてみたいな。」 「もっとたくさん玉をいれたいな。」

2	ゲームを楽しくしよう。	「投げ方を工夫するとうまくいくかもしれないな…。」
3	遠くにとばすコツを見付けよう。	「高く投げると遠くに飛んだよ！」 「コントロールもするにはどうすればいいかな。」
4	見付けたコツを試してみよう。	「高すぎてもダメだな。」 「足の向きも関係あるかもしれないな…。」 「上投げのふわっとしたボールを投げてみよう。」 「肩を使うってどういうことかな…。」
5	コースづくりをしよう。	「コースに合った投げ方があるのかな。」 「もう少しコースの工夫を考えたいな。」
6	コースづくりをしよう。	「スコアをつけてチームで回ってみたいな。」
7	コースを回ろう。	「もっと少ない数で回りたくないな。」 「力加減がむずかしいな。」
8	スコアをのばそう。	「もっとスコアを伸ばしたい！」 「やっぱり、遠くにとばしたい。」 「投げたい場所に投げたい！」
9	コースごとの投げ方を考えよう。	「投げ方を上投げや下投げなど投げ方がいっぱいあるな。」 「友だちの投げ方を参考にしたいな！」
10	自分の投げる力の伸びを感じよう。	「もっとのばしたい！」

### (3) 協働的な学び合いが生まれる教師の手立てと学習展開の工夫

体育科学習の中で、子どもたちが共に学び合っていくことの良さを感じられるよう、以下の手立てや工夫が考えられる。

#### 教師の手立て

- 動きの可視化
  - ・ 子どもたちが見付けたコツやポイントにつながる言葉を価値付け、整理して掲示する。
  - ・ タブレット端末を活用し、保存、再現、スロー再生、繰り返し見ることができるようにする。
  - ・ ICT 機器とアプリを活用し、見本の動きの動画や友だちや自分の動きをいつでも見ることができるようにする。
- ルールや規則、また、教具や教材の研究・開発をする。
  - ・ ルールや規則について、シンプルで誰もが楽しめるものを目指し、子どもたちが工夫して楽しみを広げられる余地のあるものにしていく。
  - ・ 既存の教材を子どもたちの実態に合わせ、簡易化したり再検討したりすることで、よりよい教材・教具にしていく。

#### 学習展開の工夫

- ジグソー型の学習形態を用いた学習展開の工夫。
  - ・ 体育科学習では、教える・教えられる、の関係が固定化されがちである。その関係性を崩すために、全員が主体的に学びに向かい合える一つの手立てとして、ジグソー型の学習形態を用いる。各グループで学んだことで自信をつけて、全員が動きについて語れる材料を持って集まることを理想と

している。

#### (4) 動きの感覚を価値付ける学びの過程

子どもたちは、自身の動きの感覚を価値付ける時、主観的な視点と客観的な視点をもって高めていくと考えている。主観的な視点と客観的な視点について本校体育科では以下のように捉えている。

まず、本校体育科で言う主観的な視点を持って運動している姿とは、自分のイメージしたことを実際の動きとして具現化していく姿である。自分がイメージした動きを自分で動いてみてイメージに近付けていく。回数をこなすことで近づくこともあれば、友だちや先生からの助言で気づくこともあるだろう。つまり、自分の動きを高めようとし、自分の動きに還している姿と考えている。

また、同様に客観的な視点を持って運動している姿とは、友だちと動きの感覚を基に、チームやお互いのよいところや課題について共有し、運動している姿である。友だちのことも、自分ごとのように捉え、解決に向けたアプローチを様々な視点で行っていく。このように、自分から以外の視点から動きを高めようとしている姿と考えている。

学習を進める中で、子どもたちの感覚の捉え方を察知し、足りない視点を示唆することで、個人の動きを高めたり、友だち同士の考えを繋いだりする。そのことによって単元での学びを深めたり、次の課題への意欲を高めたりしていく。

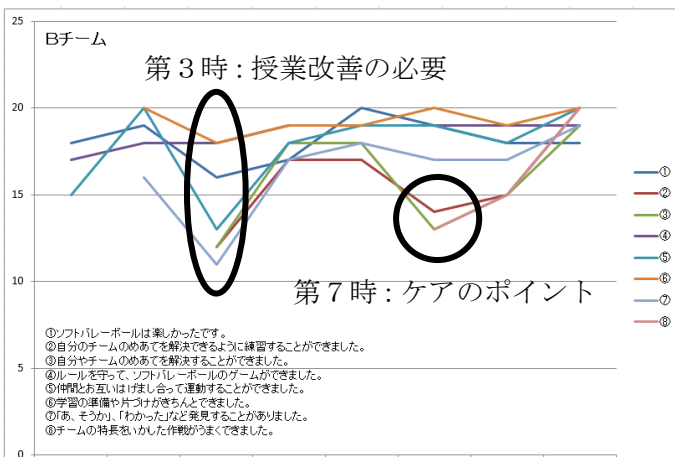
### 3. 体育科における評価について

#### 子どもたちの力を伸ばし、授業改善につながる評価

各時間のめあてに沿った動きを見付けるようにし、授業の途中、ふりかえりの場面で取り上げるようにする。また、体育ワークの下欄に形成的評価を書けるようにしている。点数化し、個人やチームごとに分析を行い、チームや個人の状態を明らかにし、次時の授業改善に用いる。

#### 【チームごとに集計した形成的評価の例】

ソフトバレーボール（ボール運動領域）5年



左図のようにチームごとに形成的評価を集計してグラフ化することで、第3時においては、他のチームにも同じ傾向が見られたため、授業改善が必要なのことがわかった。また、Bチームにおいては第7時、ケアするポイントがはっきりとしている。

実践事例をQRコードにして掲載しています。興味のある方はご覧おきください。